

卒寿超え

卒寿超え母はいつまで母なるや五目飯炊き我に勧める

茉莉花

あの母の破顔を乞うも能面に老い衰えし貌の悲しき

蘇生

小面に寒気の凍みる暁暗に我の知らざる悲哀を思ふ

たまこ

ゴッホ描くをみな乳房うかびくるデッサン一枚まさしく悲哀

れん

悲しみと哀しみなるを分けざれば花にも涙わが眼に真珠

深海鮫鯨

トゥテクタタ暁祈る十字の木くそを放りだせ悲しみを喰え

海月

悲しみの素数ばかりをアマデュウス魚の音符を掬ひとりては

真奈

魚からオタマジャクシに進化してカエル跳び込む酒池の楽の音

深海鮫鯨

水底に春の和音を奏づるや生れしばかりのオタマジャクシは

かわせみ

土手にたつ桜けぶれる花芽どき耳耀はせて春風ぞ吹く

ぎを

夕暮れを桜の梢に白い立つ闇にもましてときの勢い

くりおね

くれなるの樹液ふつつ吸ひあげて桜千本夜を眠らず

かわせみ

夜の窓の結露を拭ひし指の痕に遠くの街のネオン煌めく

たまこ

伝へ聞くミモザの蕾ふくると指もてつつむや光の春を

ぎを

長久手の愛地球博雨の日ぞミモザ咲きみしはや去年のこと

れん

花ミモザ手折りてくれし住職の二代目既に現世になし

文枝

ジーパンを着こなし春の街をゆく人ありわが家の和尚さんらし

たまこ

来てみればジーパン穿ける閻王がウインクしたり黄泉不思議

深海鮫鯨

レイを首に浜辺に踊る土地の娘の揺らぐ肢体に南国の陽が

蘇生

紫が青に薄まり碧^{みどり}あり風よそよげよ波よ歌へよ

深海鮫鯨

根府川の駅にカンナの咲く見れば相模の海にのり子偲ばん

真奈

自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ／のり子が逝つた

海月

電話機の声びしびしと怒りおり呆然として師の訃報聞く

千種

われもまた燃えるゴミの身カラス鳴く朝にゴミ出し^{よみ}黄泉に歌詠む

深海鮫鯨

小利口なカラスと今朝も知恵くらべ二羽の鴉がゴミを開陳

蘇生

わたくしが一番きれいだったころ、鴉は七つの子を育ててた

かわせみ

カラス鳴きテレビつければ花舞へり^{かようかつびよう}花様滑冰日の本に金

深海鮫鯨

コンパス的脚でくるくるジャンプ・ジャンプ荒川静香が金メダル獲る

たまこ

諺に名は体をとはいうものの静香に二様あるを知りたり

蘇生

荒ぶれる川よと拍手どよめけり静かに香る花の水辺に

深海鮫鯨

沈丁花の香りが癒してくれるだらう見送るならば三月がいい

たまこ

梅もまだ芳しからぬ春にをり沈香丁子のアロマを聞くか

深海鮫鯨

紅梅について白きも春雨にいきいきとして枝をのべをり

蘇生

もう少し眠つてゐよう日曜の朝の雨の音のやさしき

たまこ

春眠の暁知らぬ際にゐて残夢に散りぬなが空なみだ

深海鮫鯨

馬酔木咲く春の岬の細き道見やれば海に伊豆の七島

弁慶

ポケットの中の野生や吾が子泣く外には春雨ふり続く日に

ぎを

宵までの千筋の雨はすでにして野にも春なる今朝のぬくもり

蘇生

雨あがりボケの花芽もふやけたりふけゆく脳に紅白の彩

あや

去年の冬に貰ひし栞に描かれたる水仙にほう弥生はちかく

たまこ

桃の枝邪気を抜ふと贖ひて向う三軒明日はひなの日

海月

総領の嫁してこの年ひとり言繰り言ならべ雛を飾る

寂

冬眠より覚めし金魚の吐く泡のまぶしさこんな言葉がほしい

たまこ

ぶくふくととってんかぁーとビオトープなにが哀しいなに云いたいねん

海月

すし飯に色重ねゆくいっぺんに花咲き揃ふ津軽の春よ

雛菊

苦手なる錦糸卵に挑戦すもはや昨日の私ではない

たまご

あの世から見れば昨日のわれがをり花咲く庭に二羽の鶏

深海鮫鯨

流れくむ二つの賞に花咲ける詩人清水のリリシズムの詩

蘇生

目を上げて言ってみやうかもう一度きみたちこそが与太者である

真奈

老ゐの身に春は来たれりいま一度見上ぐる空に飛ぶ宝船

深海鮫鯨

ありがたや歌の心に癒されて与太にも春はありがたきかな

蘇生

人工衛星^{サテライト}春の星座を過ぎるころ地には桜の荅ふくらむ

かわせみ

ふくらむは花のみならず鼻マスク伊達に息吹く偽花粉症

深海鮫鯨

四温にて日々に色濃きスギ花粉ティッシュの箱に手を伸ばす日々

蘇生

スギ花粉涙滴る街の中ホモサピエンス悲しからずや

弁慶

花粉には小さき妖精の棲みをるや引くな鼻毛を抜くな鼻の毛

深海鮫鯨

坪庭に一群馬酔木の花咲けり母のよぶ声内耳をよぎる

寂

夜を通し雨戸打ちたる春疾風すでに色なき紅き梅が枝

蘇生

樹に札を「おかめざくら」と老夫婦丹精こめし花の愛らし

真奈

振り向かば同床異夢の歲月か偕老の花 同穴の墓

深海鮫鯨

ふらここの妹笑ふ夢さめた恙なしやねとうさんかあさん

海月

梅の花を通りすぎたる風さそう岸辺に見ゆる木立ざわめく

くりおね

風は吹き雨は打ちをる嵐聴き人なく揺れる森のぶらんこ

深海鮫鯨

数日の烈風止みて道ゆける人の気配や春の曙

蘇生

春浅く小指の火傷みづからに針さし抜けり水のにぎりよ

れん

禅林のあとに光琳しづみゆくゆたかにふかき春のゆふぐれ

ぼぼな

春光にすでに果てたる白梅の名残りの薬の淡き朱の色

蘇生

白酒に染まれば紅くなるひとを梅の散りゆく空に思はむ

深海鮫鯨

あたたかき雨があがりし朝の日に二三分咲きの花のゆかしき

蘇生

もろともに想ふ山桜その人のゆかしき遺稿取り出し読む

丹仙

桜こそ世に遺しをく思ひなれ歌に添へなん一片の花弁

深海鮫鯨

ひとひらの花は散り落つ風かすか何処にふれし遠き記憶よ

れん

風に立つ獅子にあらずは君がため千鳥が淵の夜桜見んか

ぎを

待ちわびて嬉しきものは初の花しみじみなるは花の雲かな

蘇生

待ちわびし花の下にてつらね歌こよひは花も月もなつかし

真奈

満開に行き逢いたきは三春みはるなり梅桃さくら共に咲くとか

茉莉花

ああ今年津軽の桜に会いにゆく三十年経しこの歲月よ

雛菊

昨日には鳴子の雪を楽しみて今日は都に花を愛でんと

蘇生

薄曇りこさめのなかの仄あかり桜の花のほころびにけり

れん

観音も修羅も夢むや花のした白曼陀羅に魂も漂ふ

真奈

花吹雪彼方の岸に呼ぶ声の君かと想うあかときの夢

寂

花吹雪南風に乗り高々と勿来の関を越えにけるかも

弁慶

春の宵御舟の桜楚々と散り眉月ささめく去来者は人

ぎを

万桜のたなびく雲に紅一点 緋桃酔ひをり朱臉舞ひをり

深海鮫鯨

遠望の日々に色づく山稜は恥らい残す酔いの如くに

蘇生

酔ひ残る今朝はしめじめ花の雨ぬれ屋根ながめて君し惚はゆ

ぎを

惚びしを天に帰して花は舞ふ狂女の裳裾ひるがえすごと

寂

隅田川くだりし母はゆきたまふ花霞みはるか幾世のかなた

れん

鷗江の長き堤に咲く花も音無く散りて春行かんとす

弁慶

満ちきたる潮の如く北にゆく花の便りに春は開けたり

蘇生

ひたひたと満ちくる潮ぞ夜の闇まなぶたふかくかえ甦りくるもの

れん

花は減り緑肥えゆき春老いてわが髪の毛は日々に抜けゆく

深海鮫鯨

葉桜のちらほら午後の校庭に少年野球と父母の垣

文枝

忘らえぬ春とはなりぬ含羞のやはら花びら身にふる夜は

ぎを

うす紅にまだ息づきし花の屑優しき夜を恋ふるがごとく

真奈

恋心はるかに遠き夜は明けり小鳥囀る空に爆音

文枝

一生涯俺は桜は歌はじと特攻憾む岡野弘彦

真奈

それぞれの芸の栄華を極めれど母性くすぐる岡本かの子

文枝

わかき日のかの子撩乱をもひたり吹田にみたる太陽の塔

れん

撩乱の野太き音が一転し和して幽けきメンネルコール

蘇生

桃李和歌連作百首歌集

第七二〇一首より七三〇〇首迄

平成一八年二月一六日より平成一八年四月十一日